

押し[★]ゲン

Oshi-Gen

日常に寄り添い 持続可能な地域をつくる

今号の押しゲンは、JR札幌駅の南東に位置する豊平区月寒で、長年この地の高齢者福祉を支えてきた介護施設の移設工事現場。そこには関係者が一体となって、地域住民の生活を慮る優しい気持ちが満ちていた。

特別養護老人ホーム ノテ幸栄の里建替工事

岩田地崎建設株式会社

【今月の推し】

- ★ 徹底した住民目線で
安心を提供
- ★ アナログ感覚も
大事にする姿勢

今や国内・海外へ 事業展開して一世紀余

札幌市豊平区は、クラーク博士像で有名なさっぽろ羊ヶ丘展望台が位置する緩やかな丘陵地帯が南部を占め、その展望台からは一望千里の広大な街並みが広がる。この北の大都市・札幌に創業し、今や国内はもとより海外にまで事業を展開するなか、二〇二二年に一〇〇周年という大きな節目を迎えたのが岩田地崎建設株式会社だ。先の周年を機に「安心で豊かな社会環境づくりに貢献する」というミッションを策定し、全道・全国、そして海外の各現場で「地域とのつながりを大切にし、頼られ、親しまれる現場」を目指す。そのビジョンを実現すべく本現場でも様々な取組みが実施されている。現場を統括する松本啓所長にお話を伺った。「本工事は、開設から四〇年以上も住民の福祉を支え、かつ法人の発祥となった施設の老朽化に伴う移設建替えです。長くこの地に根付いてきた施設だけに、周辺住民の生活に少しでも貢献で

しセットバックしている。これも地域貢献の一環と松本所長は語る。「地下鉄の出入口と駐輪場の看板が隠れないための工夫です。車一台分が一時停車できるスペースとしても活用し、交通渋滞を引き起こさないように配慮しています」。現場の目の前は交通量の多い国道。周辺住民の生活に支障がないようにとの配慮の表れだ。地域住民の目線を常に忘れない気配りが、日常に寄り添うような現場をつくり上げていた。

アナログ感覚も よい建物に不可欠

岩田地崎建設はBIMやドローンなどのICT導入に積極的だが、



仮囲い壁面の住所表示。一般の方が活用しており、地域貢献活動の一つとなっている。



手すりのついたトイレや水回りなど、高齢者施設ならではの設備。(下写真撮影：中原一隆)



先行モックアップを体験する施設管理者。利用者の利便性を細かく確認する。



工事は短冊のように細長い現場の限られたスペースで検証を繰り返しながら進行。周辺の住宅や駐車場への上屋の除雪作業にも対応した。

きるような現場を目指し、各関係者と密に連携・調整しながら工事を進めています」。

ゲート付近に込められた 地域への想い

住民に配慮した細やかな取組み、その一つがゲート横の仮囲いに施された住所表示だ。地下鉄駅の地上出口すぐ隣に位置するこの現場。地上に出た通行人に自分の居場所をすぐに把握してもらえるように、更に、緊急時の通報にも役立つようにという意図がある。「当社では環境活動と社会貢献活動を一体化させた独自の取組みを『^イIECA^エ』と呼んで展開していますが、この住所表示もその一環です。目立つ工事現場を住民の方の目印として有効活用していただくという考えから始まりました」と話す松本所長。実際に駅出口から上がってきた住民がこの表示を見ながらタクシーを呼ぶ姿を目にしているという。

更にゲート付近を見ると、仮囲いの位置が敷地境界線の内側に少

デジタル活用による効率化だけでなく、「アナログな感覚」も大事にしていると松本所長は語る。「例えばBIMを駆使すれば、図面上の高さや長さはわかりますが、素材の硬さや照明の明るさまで体感することは難しい。視覚的な情報だけにとられないよう心掛けています。情報量が一番多く人の五感に働きかける「体験」と、実際に使う人のことを想像する「利用者目線」。この二つがよい建物をつくるのに大切だと考えています」。こうした松本所長の哲学は、現場運営の様々なシーンに反映されている。

トイレの先行モックアップの製作はその一例。トイレ環境は福祉施設を利用する高齢者にとって重要だ。手すりの位置、形状や強度に加えて、壁の角、緊急ボタンの位置などがイメージできるように、木造プレハブ内にモックアップを設置し、施設の管理者に体験してもらったという。「大切なのはアナログの感覚を掴むこと。管理者に座ってもらい、手すりに触れてもらうことで『この高さなら利用者も使いやすい』と納得してもらいました」。

施設利用者がどのように五感で感じるのかまで、細かな調整を行ってから施工に着手することができました。

アナログ感覚も大事にする姿勢は、新入社員教育の場でも見られた。新入社員の浦野佐喜氏はこの現場が「初」現場だ。工事は既に終盤を迎えているが、実は松本所長は「施設引き渡し後も、竣工までは浦野氏を現場に残してほしい」と会社に掛け合ったという。「竣工写真だけを見ても、仕事の実感を伴いにくい。最後に施主様から『ありがとう』と声を掛けてもらったほうが、仕事のやりがいや人間の内面的な成長にもつながるかな」と。かくいう私も若手時代に、当時の所長から『階段をつくる時は、その階段を人が上る時に安心して使



岩田地崎建設株式会社
北海道本店 建築部工事課
浦野 佐喜 Saki Urano

日々のかかわりが 信頼関係を構築

取材に訪れた三月初旬、一階フロアでは開催を翌日に控えた地域交流会の準備が進められていた。今回は施工者として会の表舞台に立つことはないが、こうした地域との交流は施工期間中何度も繰り返してきたという。二〇二三年十月と十一月には地元の中高生を迎え入れ、職業体験会を開催。現場での交流を通じた建設業の魅力の発信にも意欲的に取り組んだ。「こうした機会に子どもたちに建設業に触れて、興味・関心をもってもらいたいですね」と、松本所長は若い世代への想いを語った。

取材中、住民とすれ違うたびに丁寧な挨拶を交わす現場職員たち。「竣工後も周辺住民の方に挨拶にいきます」という所長の言葉は、地域とのつながりを終始大切にしてきたからこそだ。地域、そして社会から信頼されるモノづくりはこれからも人々の生活を支え続け、安心して豊かな社会環境づくりに貢献していくことだろう。



【 工事概要 】

発 注 者 社会福祉法人ノテ福祉会
工 事 場 所 北海道札幌市豊平区月寒東1条13丁目4番58号
工 期 2022年9月1日～2024年2月29日
工 事 内 容 特別養護老人ホームの移設に伴う新築工事
RC造、地上4階建、軒高12.45m、最高高さ12.8m
AB棟EXP接続、敷地面積4,199.44m²、
建築面積1,869.04m²、延床面積6,803.44m²
居住スペース129床、地域交流スペース、各共用部



地元中学生の職業体験では注意喚起用のピンクテープなどについて説明。「仕事のスケールの大きさに驚いた。将来の職業の選択肢に生かしたい」といった感想が届いた。

「利用者の日常にアクセントを取り入れたい」という設計者の想いが込められた室内の様子。実現するためには多様な資材の管理が必要となり相当な労力を要したが、各資材の配置情報を二重チェックして手戻りがないよう緻密なすり合わせを行った。完成した内装は事業主から好評を得ているという。（撮影：中原一隆）

ゲンバの推し☆を教えてください

“安心”を支えた温かい笑顔

1年半の工期中、すべての車を誘導してきた交通誘導員の石川久美子さんです。通行人の安全確保と毎日の交通規制を一手に引き受けてくれた心強い味方。駅の地上出口が近いので通行人によく道を尋ねられていましたが、どんなに忙しくても優しく接する姿が印象的でした。温かい人柄と笑顔でスムーズな現場運営に貢献していただきました。



岩田地崎建設株式会社
北海道本店 建築部工事課
工事長
松本 啓 Akira Matsumoto

えるかどうか、手すりのことまで入念に検討してからつくりなさい』と教えていただいたんです。だからこそ浦野さんにも、最後まで現場を体験することで成長し、次の現場でも建物をつくった後の利用者のことまで想像できるようになってもらいたいと考えたんです」。利用者目線を徹底する姿勢には、自身が薫陶を受けた経験が少なからず影響しているのだろう。松本所長の温かな人柄に触れて、浦野氏は「所長は教育熱心な熱い方です。技術面だけじゃなく、社会人としての素地も教えていただきました」と語っていた。利用者目線で検証を重ね、体験を通じてよい建物を完成させる。そして、その後に贈られる感謝の言葉こそが、この仕事の真のゴールなのかもしれない。



シャンデリアの形状や天井クロスの色がフロア・エリアごとに異なり、「利用者の生活に色どりを加えたい」という想いが表れている。